

研究指定課題 子どもの発達や学びの連続性を踏まえた就学前教育の質の向上

研究
主題

よく考えてやりぬく幼児

～人との関わりを通して自ら学ぶ力を育てる～

杉並区立高円寺北子供園



挨拶

杉並区教育委員会教育長 井出 隆安

幼児の遊びは自発的な活動です。決められたゴールはありません。遊びの過程で目標ができ、問いが生まれ、様々な探求方法で面白さを見出していきます。そして、遊びを通して幼児は周りの人とつながり、支え合い、教え合い、学び合っていきます。遊びは幼児にとって重要な学習であると言えます。

本園では、幼児の遊びや生活の中での人との関わりに焦点を当て、幼児が考えてやりぬくための保育の在り方について研究を進めてまいりました。本園の研究成果が多くの就学前教育施設で活用され、発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育が更に充実し、小学校教育へと接続していくことを願っています。

はじめに

杉並区立高円寺北子供園長 高橋 章子

研究テーマにある、「よく考えてやりぬく」は、本園の教育目標のひとつでもあります。幼児が、人との関わりを通して、興味や関心をもった物事にすすんで関わり、深く広く考え、やり遂げていく。これは、その後の教育において基盤となる力となります。子供園での様々な遊びや生活を通して、幼児が学ぶ面白さを味わい、それぞれの力や持ち味が発揮できるよう、保育者も日々の保育の在り方を繰り返し学び合ってきました。

この研究を進めるにあたり、丁寧な御指導と温かく支えてくださった河邊貴子先生、そして貴重な研究・発表の機会をくださった教育委員会の皆様によりお礼申し上げます。

よく考えてやりぬく幼児 ~人との関わりを通して自ら学ぶ力を育てる~

よく考えてやりぬく とは…

幼児自身の中に芽生えた課題に対し、深く掘り下げて考えたり、他の物事と関連付けて考えを広げたりしながら、解決に向けて行動し、納得・満足・充実した状態になること。

よく考えてやりぬく ために…

幼児が、主体的に課題に取り組むためには、保育者による様々な環境設定や援助が必要である。また、課題に向かう中で、考えを深めたり広げたりしながら最後まで取り組むためには、心の育ちを支える保育者やモデルとなる人の存在、動き、言葉が必要である。
幼児がよく考えてやりぬくためには、「人との関わり」が重要である。

仮説

幼児は、興味・関心をもった対象に、主体的に関わりながら、人との関わりを通して、よく考えてやりぬくようになる。

研究の方法

事例検討

- 幼児が人との関わりを通して自ら学ぶ姿をエピソードとして記録する。
- “つなぎ手”“足場かけ”を視点として、その時期に大切な保育の在り方を考察する。

よく考えてやりぬくための“つなぎ手”“足場かけ”の意味について考える。

- 二年間の教育における“つなぎ手”“足場かけ”の意味を明らかにし、幼児が自ら学ぶ力を育てるために必要な援助の在り方を考える。

つなぎ手



幼児がよく考えてやりぬくことのきっかけになったり、共に遊びを豊かにしたりしていく他者。

※保育者は、幼児同士を、あるいは幼児の考える道筋をつなぐ役割を果たす。保育者自身も直接のつなぎ手となることがある。

足場かけ



幼児が課題を解決していく過程において、幼児自身の力で次の段階に上っていくための保育者による環境設定や援助。

事例の読み取り方

色分け

幼児の姿 足場かけ

マーク類

つなぎ手 足場かけ

経過

右のエピソードに至るまでの遊びの様子やその姿に対する保育者の願い

この時期の幼児の育ちとそのための足場かけ

- よく考えてやりぬくために必要な保育者の環境設定や援助の在り方
- 対象児とつなぎ手の関わりや重要性

4歳児10月 クリームみたいに作りたい

この事例に至るまでの経過

課題の芽生え

課題解決に向けた行動

納得・満足・充実

この時期の幼児の育ちとそのための足場かけ

事例 1 4歳児10月

クリームみたいに作りたい

幼児の思いが実現できるように、粘り強く足場かけをした事例

この事例に至るまでの経過

9月頃から、石鹸、水を使ったシャボン玉遊びや泡立て遊びをしてきた。遊びに変化が生まれるように保育者が少しの水で石鹸を泡立て、クリーム状のものを作る。周りで見ている幼児が「すごーい」「私も作りたい」「どうやるの?」と保育者とやり取りしながら模倣し遊び始めた。

A児は、同じ場において様子をよく見ているが、自分から作り方を聞くことができない。他の幼児と水の量が違うことに気付かず、思うようなクリームを作れずにいた。

保育者は、自分から友達や保育者に聞いたり、見て考えたりして、新しいやり方で遊ぶ楽しさを感じてほしいと思い一緒に活動していた。

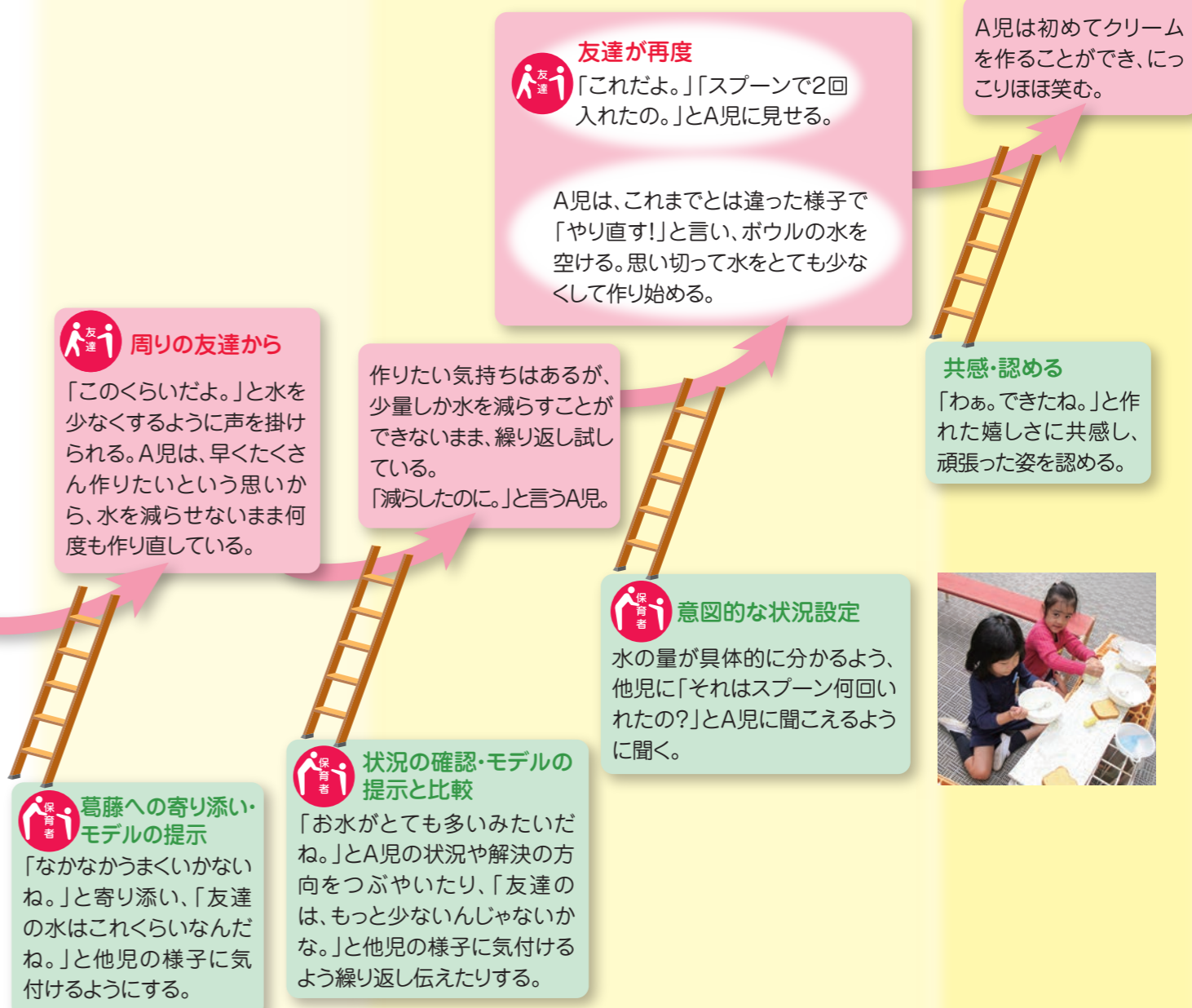


石鹸を泡立てて作るクリーム

課題の芽生え

課題解決に向けた行動

納得・満足・充実



この時期の幼児の育ちとそのための足場かけ

- 繰り返し試している姿を受け止めながら、友達の様子に気付くように声を掛けたり、具体的に言葉や動きで伝えたりする。幼児の思いが実現できるまで寄り添い、つなぎ手として何度も様々な足場かけをしていく。
- 幼児の試行錯誤の内容に見通しをもち、幼児が何度か繰り返しながらも、『できた』という嬉しさを実感できるようにする。幼児にとって、そのときに必要な経験が何かを保育者は常に考えて足場かけをしていく。
- 保育者が主なつなぎ手となっているが、周りにいる友達の様子が視界に入るような環境に配慮し、モデルとなる動きを伝えることで、少しずつ友達がつなぎ手となっていくような足場かけをしていく。



事例2 5歳児10月 教えるのって難しい

環境の工夫により、異年齢の存在がつなぎ手となってやりぬいた事例

この事例に至るまでの経過

9月下旬、併設の小学校の運動会の参加に向けて、5年生に阿波踊りを教えてもらう交流活動があった。丁寧に教えてくれた5年生に、子供の運動会での用具係をお願いすることにした。保育者は更に、5年生への憧れや大きくなることへの期待をもってほしいと考え、リズム表現での「嵐役」「虹役」を依頼することにした。

嵐を演出する5年生



運動会に向けての活動が始まるこの頃、保育者は、幼児が自分で考えたことを言葉にして表したり、相手に分かるように伝えたりできるようにしてほしいという願いをもっていた。様々な活動や遊びの中で、友達同士で相談する機会や教え合う機会を意図的に取り入れてきた。5歳児は、言葉ではうまく伝えられなかったり、代わりにやってみたりすることがまだまだあった。しかし保育者は、時間がかかっても自分たちで係決めや踊りの相談を進められるようにしてきた。

運動会では、幼児が主体となり、様々な競技や役割にすすんで取り組んでいく姿が見られた。



主体的に取り組んだ運動会の様子

B児は自分の衣装作りで、チョウの羽が美しく見えるよう、模様を左右対称に付けた。繰り返し踊りを踊ったりするなど、チョウの役を楽しんでいた。運動会当日も力いっぱい踊り、充実感をもつことができた。

意図的な状況設定

運動会の再現遊びを楽しむ中で、4歳児と関わり、5歳児としての自覚をもてるよう、4歳児の担任と連携を取り、共に活動する状況を設定する。

課題の芽生え



他の5歳児が、自分たちの衣装や大道具を運び、踊れるように場を作る動きの中で、B児は自分から4歳児に「何の役がやりたいの?」と聞き、その衣装を着せてあげている。

運動会の翌週 4歳児が

5歳児のリズム表現を教わりに来る。

環境の構成

衣装をラックに掛けたり並べて置いたりして、幼児が必要なものを運びやすいようにしておく。5歳児が自分たちで準備して進められることで、4歳児に頼られる喜びや自信につながるようにする。

課題解決に向けた行動

「ここに集まって。音楽が鳴ったら行くの。」と言葉だけで伝える。

異学年 踊りの隊形が崩れた 4歳児の様子を見て

踊りの輪の中に自分も入り、一緒に動いて知らせる。



異学年 踊り方が分からない 4歳児の様子を見て

後ろから腕を支えて、踊り方を教える。



異学年 自分たちで踊れるようになった 4歳児の様子を見て

少し離れたところから見守り、時には「ハイ!今、回って。」と言葉で示す。



認める

保育者が「お姉さんに着せてもらって嬉しいね。」とB児が関わっている4歳児に対して声を掛けることで、B児本人が自分から行動したことの良さに気付けるように、その姿を認める。

環境の構成

幼児の要望に応じて曲を流したり、必要に応じて環境を整えたりする。

見守る

5歳児が最後まで自分の力で、4歳児に関わり、やりぬいたと思えるように見守る。

納得・満足・充実

B児は保育者に「教えるのって難しかったよ。」と笑顔で話す。

認める

本人の頑張りを認める言葉と共に、4歳児が楽しそうに踊っていたことも伝え、満足感を高める。



自分や友達の姿を客観的に見る機会としてICTを活用する



この時期の幼児の育ちとそのため足場かけ

- 幼児が自ら課題を見つけて、その達成のためにやりぬくことができるように、相手と関わらざるを得ない状況を意図的に設定していく。
- 幼児を認める保育者の言葉は、幼児の自信につながる直接的な足場かけである。幼児が関わっている相手の嬉しさなどに共感する保育者の言葉は、それを聞いた幼児にとって自分の行動の意味や自覚として伝わり、間接的な足場かけとしても効果的である。
- 運動会に向けて、自分の衣装作りから踊りまで熱意をもち、取り組んできたことの喜びや満足感が土台にあるからこそ、その楽しさを4歳児に「伝えたい」という自己課題が芽生え、最後までやりぬくことができる。そのためにも、運動会を幼児にとって自信や満足感のもてる活動にすることが大切である。
- 小学生との関わりの中で、モデルとなる動きや言葉などを見たり聞いたりした経験が、幼児にとってよりよい自分になるための手掛かりとなる。意図的、計画的な交流活動などの幼保小連携の取組を進めることで、双方の教育が充実し、円滑な接続にもつながる。

事例3 5歳児1月 街みたいになった

幼児同士がつなぎ手となっていった事例

この事例に至るまでの経過

保育者は、この時期、学級全体でイメージを共有して遊び、互いの良さを受け入れ合えるようになってほしいという願いをもって。そこで、電車ごっこをきっかけとして、遊びのテーマとしての「街作り」を想定し、ペットボトルのキャップで作った倒れない人形や、牛乳パックで作る家を幼児に提案した。これらは、材料が同じで作り方のパターンがあることで、幼児同士でも伝え合いやすい。また、他者との違いがよく見えることで、友達のアイデアを取り入れやすく、自分なりの工夫をしやすいという点がある。



ペットボトルのキャップ人形



牛乳パックの家

牛乳パックでの家作りが盛んになり、多くの幼児がそれぞれに刺激し合いながら、自分なりの工夫をして自分の家を作っていることを楽しんでいる。

家を作りながら、近くで行われている電車ごっこの電車にキャップ人形を乗せてもらって走ることを楽しむ姿も見られるようになってきた。保育者は、個々に作っている家を、そのまま終わりにせず、幼児同士のやり取りを更に楽しんでほしいと願い、援助を考えていった。



課題の芽生え

並んだ家や道を見たり、行き来を楽しんだりするうちに

「街みたいになった。」
「人形が小さいから、ミニミニランドだ。」
という幼児がいる。

保育者の動きや言葉に気付いた数名の幼児が、
道に沿って、作った家を並べたり、「こんにちは。家に入ってもいいよ。」と互いの家を行き来したりするようになる。

見守る
それぞれの家を行き来し始めた幼児同士のやり取りを見守る。

遊びの中でのモデル

個々に作ったものが遊びの中で生かされるよう、テーブルの上に牛乳パックの家と細長い段ボールの道を見立てて並べる。また、遊びの仲間として「お隣さんは誰かな?」と人形を動かす。



課題解決に向けた行動

「道がないと、遊園地に遊びに行けない。」

道を車が走ることをイメージした幼児は車を作る。

車に乗って海や山に行くというイメージが広がり、場を広げて遊んでいく。

「ここから階段を付けよう。」と考えたことを伝え、遊園地までの道をつなげる。

道がつながっていくのを見て、別の道をつなげ、「ここは幼稚園。」と言って作り始める。

銭湯、レストラン、公園、駅など、街にあるものを思い描きながら、一人で作る幼児もいれば、友達と考えを出し合って作っていく幼児もいる。

環境の構成

“ミニミニランド”というイメージや遊びが学級全体に広がっていくように、別の幼児が作っていた遊園地を街の近くに置く。

見守る

幼児同士の関わりの中でイメージの共有や伝え合いを進めていくようになった姿を受け、その関係が更に深まるように、直接関わらず見守る。

共感

それぞれの思いを受け止めたり、楽しさに共感したりしながら、遊ぶ姿を認めていく。

環境の再構成

新たな場作りや幼児のイメージの実現に向けて、必要なものや場を整えていく。

この時期の幼児の育ちとそのため足場かけ

● 幼児がよく考えてやりぬくために、これまでの育ちや実態を踏まえ、保育者は、幼児の求めるものに直接関わるような足場かけ(モデル、イメージの共有など)だけではなく、間接的な足場かけ(見守り、環境の再構成など)を大切にしている。そのことにより、保育者がつなぎ手となるばかりではなく、幼児同士がつなぎ手となり合い、自分たちで考えながら遊びを進めていく。

● つなぎ手は、直接的に言葉やものを介するだけではなく、相手の存在を認め、受け入れていくという関係の中にもある。このような受容的な人間関係が構築されると、他者との生活や遊びの中で、周りの状況を感じ取りながら、自分の力を発揮していくことができるようになる。

幼児が人との関わりを通してよく考えてやりぬくために

研究のまとめ

基盤となる足場かけ

幼児が、一つ一つの課題に向かう姿に共感し、励まし、見守り、認めるという心の育ちを支える足場かけは、幼児の育ちの段階にかかわらず、よく考えてやりぬくための基盤となる。

変容する足場かけ

- 幼児の心を動かす対象との出会いの場を設定したり時間を保障したりする。
- 幼児が遊びや生活の様子に気付くように、状況を知らせたりモデルとなったりする。
- 幼児同士が伝え合う機会を意図的に設定し、促す。
- 安心して遊びや生活を進めることができるように、決まった言い回しやパターンを共通に経験する機会を取り入れる。

直接的な足場かけから

間接的な足場かけへ

- 自分から選んで対象と関われるような環境の構成や、遊びが更に豊かになるような環境の再構成をする。
- 保育者の願いや意図に、幼児が自ら気付くことを促すため、モデルとなる他児の言動を通して伝えたり、全体にさりげなく声を掛けたりする。
- 遊びや生活に必要なことを、幼児同士が主体的に伝え合っていけるよう、使う道具や、手順、内容、場所などの示し方を日常的に工夫する。

変容するつなぎ手



入園当初、保育者自身がつなぎ手となり、人への信頼感や自尊感情等、人と関わる上での丁寧な基盤作りをする。

保育者がつなぎ手となりながら、周りの様子にも意識が向くよう、友だちを巻き込む足場かけを意識し、友だちがつなぎ手となるようにする。

幼児は、直接、言葉やものを介して、つなぎ手になる。その中で、ものの扱い方や相手に分かる伝え方を習得していく。

同じ場においても直接関わりのない友だちもつなぎ手になる。その動きや言葉、対立する意見等も含め、それを感じたり受け入れ合ったりしながら、受容的な人間関係の中で、自分の力を発揮していく。

幼保小連携の視点

- 幼児は、モデルとなる小学生の姿を自分の中に取り込み、表現しようとする。
- 小学生の躍動感、楽しそうな雰囲気、担任と児童の関係性を幼児は感じ取っている。
- 小学生の姿そのものがつなぎ手となり、大きくなることへの期待や、幼児の学びにつながる。

ICTの活用

- ICTを活用した映像の中の自分や友だちの姿がつなぎ手となり、客観的に見ることで、良さに気付いたり新たな自己課題を見付けたりしていく。

- 基盤となる足場かけは、常に幼児がよく考える姿を支えるものであるとともに、最後に納得・満足・充実した状態になるために必要な足場かけである。足場かけの変容は、幼児が自ら対象に主体的に関わり、遊びを豊かにしていこうとする力が育ったことの表れである。
- つなぎ手が、保育者から幼児同士に変わっていくことは、幼児が互いに影響を受けながら、自分たちで遊びを豊かにしていこうとする力が育ったことの表れである。

幼児が対象に主体的に関わり、人とつながり合う状況の中でよく考えてやりぬくようになるためには、保育者はつなぎ手の変容を意識しながら、足場かけをしていくことが大切である。

今後の課題

幼児が主体的によく考えてやりぬくために、保育者による心の育ちを支える足場かけを基盤にし、幼児同士がつなぎ手となり合いながら、共に学ぶ力を育てていくよう、更に研究を深めていく。

■御指導いただいた先生 聖心女子大学教授 河邊 貴子先生

■研究に携わった教職員

園長：高橋 章子	4 歳 児：黒川 ゆかり／富田 紀美代	保育補助：杉本 昌代／笹川 真由佳／鈴木 清美
副園長：大川 麻弓	5 歳 児：大川 麻弓／宮田 睦子	用務調理主事：庄司 美智子／村上 美津子
主査：永久 昌子	保育助手：山形 秀子／倉橋 友輝	看護師：小川 千重子
杉並区立杉並第四小学校教職員	介助員：紺屋 良子／東海林 美奈／平原 律子	平成 30 年度：相澤 朗子／阿部 麻子／鬼藤 槇子
		育休：津田 優希

